

子宝三番叟

常磐津

全詞章

常磐津

作詞者・作曲者・初演年不詳

おおさへおおさへ悦よろこびありやよろこびありや、我悦わがよろこびを此処ここより外ほかへはやらじと思おもふ、ハアア罷まかり出たる者は八幡大臣はちまんだいじんです、太郎冠者たらうくわじやあるか

ハアア御前おんまへに

念ねんなう早はやかつた

太郎冠者たらうくわじやと召めさるる故ゆゑ、随分物ずぶんものに罷まかり立つて候さふらふ

太郎冠者たらうくわじやに尋ね度たづき事ことのあり、身みは福人ふくじんと見え候みか又徳人またとくじんと見え候みか

ドリヤドリヤハアア頼たのふだる方は、天適福人てんてきふくじんと見受け候みう

ヤレヤレ目利めきかなめききかな、身共みどもこそ福者ふくしやにてある、其内そのうちにも子福者こぶくしやにて、子供十二人こどもじふににん持ち候さふらふ、上六人かみろくにんは瑠璃るりの様な女子をなごにて、下六人しもろくにんは玉たまの様な男子をとこにて候さふらふ、其十二人そのじふににんの子供等こどもらを、車座くるまざにぐるりと直し置き、一度いちどに呼ぶ様やうに名なをつけて候さふらふ

実にげにと目出めでたき御事おんことかな、シテ其御名そのおんなは何と御付候おつけさふらふぞ

まつおつとりちがひおとよけさよたつ松まつみる松まつだんたらいなごにかいつくひつつく火ひうち袋ぶくろぶらぶらと付てあれ

切々珍さてきめづらしき御名おんなにて候さふらふ

サレバ此十二人このじふににんの子供等こどもらが、四季しきの遊びあその面白おもしろさ

それは目出めでたき御楽おんたのしみ、その若子達わかごたちの御遊びおんあそび、爰ここにてまなび御見おんみせ候さふらふへ

なかなか易やすき御事おんこと、先づ太郎冠者たらうくわじやには元もとの座敷ざしきへおもおもと直り候なほへ

某座敷それがしざしきへ直なほらうずる事こと、頼たのふだる方かたの御まなびより易やすう候さふらふ、ひらに御学おんまなび候さふらふへ

平ひらに直り候なほへ

ああらやうがましや、とうとう御始おんはじめ候さふらふへ

心得こころえ申して候まう

佐保姫さほひめの霞長閑かすみのどかに明初あけそめて、今朝白々けさしらじらと富士ふじの顔かほ、うつる鏡かがみの影添かげそへて、松まつと竹たけとの二柱ふたはしら、賑にぎふ春はるの稚さなごと、門かどに遣羽子やりはこする代よに、風吹かぜふくな尚吹なほふくな、金きんの団扇うちはで追羽根おひばねせうとおしやる

つくや手毬てまりの数かずへ歌うた、一つと言いひて如月きさらぎの、種蒔たねまく小田をだの紙詣かみまひり、振分ふりわけ髪がみのいたいに、緋ひ無垢むくは

椿白無垢つばきしろむくは、梅うめの荅つばきの風車かざぐるま、くるくるくと廻まはる日の、早鷄はやとり合雛遊あはせひなあそび、妹育いもせかは変かはらぬ諸白髪もろしらが

頂いただく軒のきに菖蒲しやうぶ茸ふく、幟のぼりの勇いさましく、菖蒲しやうぶうち合あふ形姿なりすがたの、武たけきは尚なほも潔いさぎよく、隙ひまゆく駒こまの竹たけの

尾をに、鞭むちをくれい手綱たづなかい繰くりんりん

納涼すずみにいその螢狩ほたるがり、柳やなぎの水みづの影かげいそぐ、手てに手とを取りとて鵲鳥かざさぎの逢瀬あふせを渡わたす天あまの川がは、笹ささ一夜ひとよの散ちらし書がき、

さらさらささら団扇うちは太鼓たいこの拍子ひやうしよく、皆撫子みななでしこの手てを揃そろへ、優やさしき声こゑの張強はりつよく

〔二上り〕せりやい申まうそはりやい申まうそ、せり合あひはり合あひ石投いしないやよ、こちの踊をどりはアア花踊はなをどり、

惚ほれたらムいざれござれ、惚ほれてほの字じの文書ふみかき初めて、似合にあはぬとても縁えんぢやもの、其着綿そのきせわたの菊襲きくがさね、薫かをる

袖そでがき中なかもよくほたけ祭まつりの

とりどりに花はなを飾かざりしうちかけ匂におふ産神詣うぶがみまひり、黒髪くろかみに置おく白雪しらゆきの、降ふれや積つもれや降ふれや、招まねくや年としの貢物みつぎもの、たへずかからぬ童幼わらんべの、ちくま遊びあそびの千代ちよかけて、千代ちよに八千代やちよにさざれ石いしの、動うごかぬ御代みよこそ目出めでた

目出度めでたけれ